

平山 郁夫

IKUO HIRAYAMA : A RETROSPECTIVE — PILGRIMAGE FOR PEACE

祈りの旅路

2007年9月4日[火]-10月21日[日]

東京国立近代美術館

第1章 仏陀への憧憬

1959年の《仏教伝来》(no.11)の制作を機に、平山郁夫は1960年代後半にかけて、釈迦の生涯を題材に多くの作品を制作する。しかしそれは信仰の対象としての仏画ではない。描かれているのは釈迦という一人の人間のドラマである。平山は、苦行する釈迦の姿に、被爆の後遺症を

背負った自身の人生を重ねあわせることで、劇的であると同時に実感としての生の重みをあわせもった重厚で深みのある画面をつくり出した。これらの作品は次のステップ、玄奘三蔵の歩いた道をたどり、シルクロードを踏破する足がかりともなってゆく。

no.	作品名	制作年	所蔵	展示期間	解説文
1	出山	1960(昭和35)年			
2	入涅槃幻想	1961(昭和36)年	東京国立近代美術館		●
3	行七歩	1962(昭和37)年	平山郁夫美術館		
4	受胎霊夢	1962(昭和37)年	広島県立美術館		●
5	出現	1962(昭和37)年	佐久市立近代美術館		●
6	建立金剛心図	1963(昭和38)年	東京国立近代美術館		●
7	天堂苑樹	1966(昭和41)年	佐川美術館		
8	捨宮出家図	1970(昭和45)年			
9	鹿野苑の釈迦	1976(昭和51)年			
10	祇園精舎	1981(昭和56)年	足立美術館	9月4日-9月24日	●

第2章 玄奘三蔵の道と仏教東漸

平山郁夫は《仏教伝来》の制作以降、玄奘三蔵の足跡を自らたどり、絵画化したいという願いを抱くようになる。それは玄奘の苦難に満ちた旅路と、挫けることのなかった不屈の意志を自らの人生に重ねようとしたのであろう。またそれは、画家としての果てしない道を歩んでいくために

意識的に自分自身に課した闘いであったかもしれない。この巡礼にも似た旅から生み出された数々の作品には、成功した玄奘の苦闘や歓喜への共感ばかりではなく、志を半ばに途中で倒れていった多くの僧たちの願いもこめられている。

no.	作品名	制作年	所蔵	展示期間	解説文
第1節 玄奘三蔵の道					
11	仏教伝来	1959(昭和34)年	佐久市立近代美術館	9月4日-9月24日	●
12	天山南路(夜)	1960(昭和35)年	佐久市立近代美術館	9月26日-10月21日	●
13	求法高僧東帰図	1964(昭和39)年	平山郁夫美術館	9月26日-10月21日	
14	バーミアンの大石仏	1968(昭和43)年	箱根・芦ノ湖 成川美術館		●
15	塵耀のトルキスタン遺跡	1970(昭和45)年	駒形十吉記念美術館		
16	大雪山霊夢	1976(昭和51)年			
17	阿育王石柱	1976(昭和51)年	山種美術館	9月4日-10月9日	●
18	西域の千仏洞	1979(昭和54)年	国際交流基金		
19	トルファンの遺跡(高昌故城)	1979(昭和54)年			
20	渺々たる長城 終竟嘉峪関	1980(昭和55)年	日本製紙 株式会社		●
21	タリム河	1980(昭和55)年	米子市美術館		
22	インダス河上流 久遠の流れ	1982(昭和57)年	佐川美術館	9月26日-10月21日	
23	ガンダーラの遺跡	1983(昭和58)年			
24	ブダガヤの大塔	1983(昭和58)年			
25	尼連禪河朝陽	1983(昭和58)年		9月4日-9月24日、10月10日-10月21日	
26	敦煌鳴沙	1985(昭和60)年	箱根・芦ノ湖 成川美術館		●
27	敦煌三危	1985(昭和60)年	箱根・芦ノ湖 成川美術館		●

no.	作品名	制作年	所蔵	展示期間	解説文
28	絲綢の路 パミール高原に行く	2001(平成13)年	平山郁夫美術館		
29	大唐西域画 明けゆく長安大雁塔 中国	2007(平成19)年	佐川美術館		●
30	嘉峪関に行く 中国(1)	2007(平成19)年	佐川美術館		●
31	嘉峪関に行く 中国(2)	2007(平成19)年	佐川美術館		●
32	高昌故城 中国(1)	2007(平成19)年	佐川美術館		●
33	高昌故城 中国(2)	2007(平成19)年	佐川美術館		●
34	西方浄土須弥山(1)	2007(平成19)年	佐川美術館		●
35	西方浄土須弥山(2)	2007(平成19)年	佐川美術館		●
36	西方浄土須弥山(3)	2007(平成19)年	佐川美術館		●
37	バーミアン石窟 アフガニスタン(1)	2007(平成19)年	佐川美術館		●
38	バーミアン石窟 アフガニスタン(2)	2007(平成19)年	佐川美術館		●
39	デカン高原の夕べ インド(1)	2007(平成19)年	佐川美術館		●
40	デカン高原の夕べ インド(2)	2007(平成19)年	佐川美術館		●
41	ナーランダの月 インド	2007(平成19)年	佐川美術館		●

第2節 仏教東漸

42	斑鳩里曼荼羅	1965(昭和40)年			
43	大仏開眼供養記図	1975(昭和50)年		9月26日-10月21日	●
44	雲崗盧遮那仏	1976(昭和51)年	駒形十吉記念美術館		●
45	東都洛陽白馬寺	1976(昭和51)年			
46	招提寺盧遮那仏	1976(昭和51)年	箱根・芦ノ湖 成川美術館		
47	西藏布達拉宮	1977(昭和52)年	名都美術館		●
48	ラマ教の寺(A)	1978(昭和53)年	株式会社 杉江画廊		
49	ラマ教の寺(B)	1978(昭和53)年	財団法人 今岡美術館		
50	麦積山三尊仏	1980(昭和55)年			

第3章 シルクロード

シルクロードは、古くから東西を結ぶ交通路であり、文化が行きかう交流の道でもあった。平山郁夫にしてみれば玄奘三蔵の道がシルクロードと重なる以上、この道を歩むことになるのは当然のなりゆきだったろう。平山は、文明や歴史は名もなき一人一人の想いの積み重ねからなると考え、

画面にそれを写しとろうとする。平山の描く風景画や人物画が分厚い歴史の確かな堆積をも感じさせるとすれば、その作品はかつて描かれた伝統的な歴史画とは異なる、平山が新しく切り開いた現代の歴史画ということもできよう。

no.	作品名	制作年	所蔵	展示期間	解説文
51	高耀る藤原京の大殿	1969(昭和44)年	株式会社 ティラド		●
52	中垂熱閼図	1971(昭和46)年	駒形十吉記念美術館		●
53	オリエントの曙	1971(昭和46)年	箱根・芦ノ湖 成川美術館		
54	牧人	1972(昭和47)年	ポーラ美術館		●
55	シリア砂漠	1972(昭和47)年	メナード美術館		
56	バビロン王城	1972(昭和47)年	山種美術館	9月26日-10月21日	●
57	ベルセポリスの遺跡	1974(昭和49)年	箱根・芦ノ湖 成川美術館		
58	波斯黄堂旧址	1974(昭和49)年	広島県立美術館		●
59	ベルセポリス炎上	1976(昭和51)年	高島屋史料館		
60	鄯善国妃子(楼蘭の王女)	1976(昭和51)年	箱根・芦ノ湖 成川美術館	9月4日-10月9日	●

no.	作品名	制作年	所蔵	展示期間	解説文
61	飛鳥の群山	1976(昭和51)年	外務省	9月26日-10月21日	
62	マルコ・ポーロ東方見聞行	1976(昭和51)年			●
63	西域の馬	1978(昭和53)年	高德院	9月4日-10月9日	
64	絲綢之路天空	1982(昭和57)年			●
65	大毗波沙国桃源境	1983(昭和58)年	呉市立美術館	9月4日-9月24日	
66	月域月彩(パルミラ・シリア)	1984(昭和59)年			●
67	長安の残輝	1987(昭和62)年	奈良県立美術館	9月4日-9月24日	●
68	楼蘭の遺跡・昼	1990(平成2)年	愛知県美術館	9月4日-10月9日	●
69	楼蘭遺跡を行く(日)	2005(平成17)年		10月10日-10月21日	
70	楼蘭遺跡を行く(月)	2005(平成17)年		10月10日-10月21日	

第4章 平和への祈り

《広島生変図》(no.71)と《平和の祈り—サラエボ戦跡》(no.76)には、平和への願いが率直にあらわされている。平山郁夫が抱く平和への想いは、真理を伝えようと求法の道に殉じた人々やシルクロードの繁栄を支えた名もなき人々の想いを、荒涼とした大地に聞こうとすることとも共通して

いる。また、仏教伝説にもとづく連作を描きはじめた頃、原爆で死んでいった人々のために、後世に残るたった一枚の絵を描こうと苦しんだことにもつながっている。平山の制作の根底にあるもの、それは平和への祈りである。

no.	作品名	制作年	所蔵	展示期間	解説文
71	広島生変図	1979(昭和54)年	広島県立美術館		●
72	熊野路 古道	1991(平成3)年	早稲田大学図書館	9月4日-9月24日	●
73	月華巖島	1993(平成5)年			●
74	流水無間断(奥入瀬溪流)	1994(平成6)年	平山郁夫シルクロード美術館	9月26日-10月14日	
75	黎明讃岐路 四国霊場八十八番 大窪寺	1994(平成6)年	香川県文化会館	9月4日-9月24日、10月16日-10月21日	
76	平和の祈り—サラエボ戦跡	1996(平成8)年	佐川美術館		●
77	八雲立つ 出雲路古代幻想	1998(平成10)年	平山郁夫シルクロード美術館	9月26日-10月21日	
78	平成の洛中洛外図	2003(平成15)年	平山郁夫シルクロード美術館		●
79	平成洛中洛外図	2004(平成16)年	平山郁夫シルクロード美術館		●
80	浄土幻想 宇治平等院	2005(平成17)年	平山郁夫シルクロード美術館		
81	浄土幻想 日野法界寺	2005(平成17)年	平山郁夫シルクロード美術館		
82	鞍馬の火祭	2005(平成17)年			●
83	西陣山口翁(99歳)	2005(平成17)年	平山郁夫シルクロード美術館		●

※展示期間の欄に表記のないものは、通期展示となります。

※解説文の欄に●印のあるものは、裏面に作品解説が掲載されています。

作品解説

2.《入涅槃幻想》

入滅した釈迦と悲しむ弟子たちを描いている。平山は被爆の経験から死に対し大きな恐怖を抱いていたため、はじめは死を迎える釈迦と弟子たちの心情をあらわすのに苦心した。しかし義父の死に直面して、釈迦の死に通じる充足感に満ちた静かな悲しみを実感した。この経験が作品の完成につながったという。

4.《受胎霊夢》

釈迦の母である摩耶夫人(まやぶにん)は、釈迦を身ごもる際、夢で白象を見たと言えられる。天空の象からはこまかな粒状の光のようなものが摩耶夫人に降り注いでおり、今まさに新しい生命が宿るその瞬間が、黒く塗り込めた夜空のなかに、神秘的にあらわされている。

5.《出現》

釈迦の入寂後の復活を主題としている。釈迦を取り囲む弟子たちや白い鳩の群などの描写は、《入涅槃幻想》(no.2)における表現を踏襲している。平山は日本の古画だけではなく、西欧美術におけるキリスト復活を描く作品も視野に入れて、この作品を制作した。

6.《建立金剛心図》

瞑想する釈迦が、襲いかかる魔性を退け、ついに悟りを開く場面である。この主題を思いついたとき、留学でヨーロッパに滞在していた平山は、西欧の宗教芸術に圧倒されながら、それでも日本画の道を深めたいと念じる自身の姿を、この釈迦に重ねたのだという。

10.《祇園精舎》

祇園精舎はインド北部のスラバステーにあった仏教施設で、釈迦が説法を行った場所の一つ。森の中で説法を行う釈迦と、それを熱心に聞く弟子たちを描いている。《建立金剛心図》(no.6)のような初期の作品に見られる光の表現などを効果的に用い、深い精神性をあらわしている。

11.《仏教伝来》

インドへの長い旅の帰途、オアシスに憩う玄奘三蔵を描いている。画面全体に幻想的な雰囲気が漂うこの作品は、被爆の後遺症に苦しむ平山が、自ら救われることを願い、平安を求めて描いたものである。はじめて仏教的な主題を扱った作品で、文学的ともいえる解釈でその後の画業の方向性を決定づけた。

12.《天山南路(夜)》

天山南路は天山山脈とタクラマカン砂漠の間にあり、玄奘が西へ向かう際に通った道である。本作品は、仏典を中国に持ち帰る僧たちが一晩、天山南路のオアシスで休息をとる場面である。作風は前年の《仏教伝来》(no.11)に連なるが、主題の内容はのちのシルクロードの連作につながるものである。

14.《パーミアンの大石仏》

アフガニスタンの首都カブールから北西に240kmほど離れたところにあるパーミアンには、古くから石窟寺院がひらかれた。この作品は、玄奘も目にしたというパーミアンの2体の大仏のうち、高さが55mある西の大仏を描く。平山が玄奘の足跡を追って初めて行った取材旅行の成果の一つである。

17.《阿育王石柱》

阿育王(アショーカ王)は、古代インドのマガダ国に興ったマウリヤ朝の3代目の王。彼は仏教を深く信仰しダルマ(法)による統治を行い、領内に石柱を立てて統治のあり方を知らしめた。平山は1969年以来何度もインドを訪問している。本作品はその時の写生がもとになり生まれたと考えられる。

20.《渺々たる長城 終竟嘉峪関》

嘉峪関(かよくかん)とは、現在の甘粛(かんしゅく)省北西部にある万里の長城の西端にあたる関所。平山は本作品を制作する前年、長年の憧れの地である敦煌を訪れるためにここを通過した。その際、期待に胸をふくらませる自身の心情を、唐の国を出ていよいよ西方へと出発する玄奘の心情に重ねあわせたという。

26.《敦煌鳴沙》 27.《敦煌三危》

敦煌は古くから、西域との交通の要衝であった。市街の南東に、莫高窟と呼ばれる仏教石窟がある。4世紀から14世紀にかけて造営された。《敦煌鳴沙》の画面中央に見えるのが莫高窟で、鳴沙山がその右から手前に広がっている。《敦煌三危》で遠くに見える山々が三危山である。

29.～41.「大唐西域画」

平山は2000年、奈良・薬師寺の玄奘三蔵院伽藍の《大唐西域壁画》を完成させた。法相宗の大本山である薬師寺では、始祖である玄奘三蔵の徳をたたえるために玄奘三蔵院伽藍を建立、1976年頃、当時の薬師寺管長、故高田好胤師の知りあいであった平山に制作が依頼された。しかし、壁画の公開は毎年時期が限られている。そこで、少しでも多くの人々に壁画を見てもらいたいという想いから、それらを縮小して本作品を制作した。場面は、玄奘の求法の旅のうち往路から選択されている。

43.《大仏開眼供養記図》

日本に仏教がもたらされたのは飛鳥時代のことで、聖武天皇の時代に東大寺および大仏殿が建立された。この作品では、752年に行われた大仏の開眼会(かいげんえ)の光景を、正倉院に残されるわずかな宝物や記録を手がかりに、ほとんど空想によって描き出している。

44.《雲崗盧遮那仏》

中国の北部に位置する大同の北西20kmの場所に雲崗石窟がある。平山は、1975年に初めて中国を訪問した折に、大同も訪れた。雲崗石窟第3窟の後室の中に刻まれた本尊と2体の脇侍菩薩をモチーフに、仏像そのものが淡い光を発するかに描いている。

47.《西藏布達拉宮》

この作品に描かれるポタラ宮は、チベットの中核都市であるラサの標高3700mの断崖上にあり、17世紀以降、宗教的指導者であるダライ・ラマの居城であった。無人でひときわ高くそびえ立つように描かれた宮殿は、平山が描く廢墟にも似た、孤高の存在に感じられる。

51.《高耀る藤原京の大殿》

藤原京は持統天皇が建設した都。持統、文武、元明の三代、わずか16年で710年に平城京へ遷都された。平山は発掘されたプランをもとに、今はないこの都のイメージを自由にふくらませて描いた。歴史と考古学と文学をあわせたテーマとして描いた作品で、壮大なロマンに満ちている。

52.《中亜熱鬧図》

本作品は中央アジアの熱気あふれる市場を描いている。これまで訪れた先で描きためてきたスケッチをもとに制作したものである。シルクロードに点在するオアシスの町の市場は多くの人々が行きかい、にぎわっていたに違いない。平山は訪れた町の市場で時折、そのような面影を見出すことがあるという。

54.《牧人》

1971年の暮れ、平山はシリアへの旅の途中でヨルダンに立ち寄った。本作品は、ペトラ遺跡を訪れた際、平山を案内してくれた老人を休憩の折に取材したものである。さまざまな国や地域を訪れる平山は、各地でその土地の人々をたびたび写生してきた。

56.《バビロン王城》

アケメネス朝ペルシアによって破壊された新バビロニア帝国の都バビロンを、盛時の姿に描き出す。イシュタル門や神殿、屋上に森のある空中庭園などを、遺跡やドイツのベルガモン博物館に再現展示される資料にもとづき描いているが、空想の世界ゆえの自由な画面構成を見せている。

58.《波斯黄堂旧址》

アレキサンダー大王率いるギリシャ軍に滅ぼされたアケメネス朝ペルシアの帝都ペルセポリス。その遺構のほぼ全景をあるがままに描いている。夕陽に照らされ、今は廃墟と化したこの遺跡の静寂の中に、平山はかつての人々の暮らしや激戦の情景をも見つめている。

60.《鄯善国妃子(楼蘭の王女)》

鄯善国(ぜんぜんこく、楼蘭)は、紀元前2世紀に建国され5世紀半ばに滅んだ。この作品は楼蘭の王国が放棄される際、悲しんだ王女がその地にとどまり永遠の眠りについたという伝説にもとづいている。古代の遺跡と今にも目を開きそうな女性との対比により、遠い過去と現在とが夢幻のうちに交錯している。

62.《マルコ・ポーロ東方見聞行》

中央で白馬にまたがり、こちらに視線を向ける人物がマルコ・ポーロであろう。彼はヴェネツィアの商人で、シルクロードを通過して元の時代の中国に到達したとされる。背景に組みあわされた地図には、当時存在した都市や遺跡が文字や図であらわされている。

64.《絲綢之路天空》

らくだの一行が進んでいるのは、中国で火州と呼ばれ、大地の温度が70～80℃にも達するという灼熱のトルファンである。平山は1978年に新疆ウイグル自治区を訪れた。その折にスケッチした実景がこの作品のもととなっている。らくだは平山がアレンジして付け加えたものだという。

66.《月域月彩(パルミラ・シリア)》

パルミラはシリアの首都ダマスカスの北東にあるローマ時代の都市で、シルクロードの中継地点として2世紀に絶頂期を迎えた。平山はパルミラをたびたび訪れており、遺跡を写生しながらかつてのパルミラの栄華に思いをはせたという。

67.《長安の残輝》

唐の都長安(現在の西安)は、日本の遣唐使や西域の人々が多数訪れた国際都市であった。本作品は、そのようなかつての長安の姿を想像して描いたものである。平山は、1976年にも《西都長安大街》(駒形十吉記念美術館蔵)という題名で本作品とほぼ同一の構図をもつ長安の夜景を描いている。

68.《楼蘭の遺跡・昼》

平山にとって楼蘭は最後に残された憧れの地であった。玄奘が帰国した頃にはすでに国は滅び、その後砂漠に埋もれてしまった。この地を平山がはじめて訪れたのは1986年、《鄯善国妃子(楼蘭の王女)》(no.60)を想像で描いた10年後であった。大きな仏塔の遺構がこの地のかつての繁栄をわずかに偲ばせる。

71.《広島生変図》

被爆した平山が戦後30余年を経て描いた作品。「あの日、私たちがはいつくばり、はいずり回った広島街、それは幻のように描かれるべきだろう。しかし空には、はるか天空には必ず『救い』の手が差しのべられていなければならない」と語る平山の、鎮魂の想いと生命への讃歌がこめられている。

72.《熊野路 古道》

平山はシルクロードから続く一本の道として、日本の古道に注目するに至る。熊野路を描いたこの作品は、那智大社へと続く大門坂で取材されたもの。森の暗がりや湿潤な空気が素直にあらわされ、近年の平明な画境が示されている。

73.《月華巖島》

巖島神社は平安の貴族文化が、最後に生み出した華麗な文化遺産である。海辺にたつこの建物を守ってきた人たちの篤い信仰心が、群青で彩られた深みのある画面に塗りこめられている。社頭に寄せてはかえす穏やかな潮騒は、幼少時慣れ親しんだ画家の原風景にも近い。

76.《平和の祈り—サラエボ戦跡》

1992年に起こったボスニア・ヘルツェゴビナの紛争によって、サラエボをはじめ主要な都市は廃墟と化した。恨みや悲惨さを写し取るのではなく、それをのりこえた先に美しい芸術を生み出したいと願う平山は、この作品で平和への祈りを子供たちの笑顔に託している。

78.《平成の洛中洛外図》 79.《平成洛中洛外図》

《平成の洛中洛外図》には京都御所、《平成洛中洛外図》には二条城が描かれる。それぞれ作品は独立しているが、2005年の「平成の洛中洛外 平山郁夫」展では一雙屏風に組みあわされた。現代の京都の世相が垣間見られるところに、伝統的な洛中洛外図の風俗屏風としての性格とも共通する部分がある。

82.《鞍馬の火祭》 83.《西陣山口翁(99歳)》

京都鞍馬の火祭に参加する青年と、織物の町西陣で最長老の職人である山口安次郎氏。2点の作品のテーマとするところは同じ、伝統の継承にほかならない。文化も伝統も人間一人一人の営為があってこそ存続する。そうした担い手である人間を讃える思いが率直にあらわされている。